

音声ドラマ

「私を選んで。生き延びさせて」

（奈々未編）

シナリオ全文

(1) バトル開始

囚われた私たち女の子二人は、おぞましいゲームで競わされることになった。

「先生」と呼ばれる男を相手に、悦んでもらえるようなことをして、気に入られたほうが生き延びられる、というルール。
「負けたほうに未来はない」、と言われた。

一人ずつ順番にやって、愛理はさっき終わったみたいだ。
何をしたのかわからないけど、全身ヌルヌルの裸で、ぐったりしている。

嫌だ。あの子に負けたくない。

でも私はおっぱいも小さいし、あんまりお肉もついてなくて、男の人好みの体をしていない。どうしよう……。。

そういえばゲームが始まる前に、この「先生」が話していたのを思い出した。女の子が汚れる姿を見るのが好きらしい。

私はスタッフの男たちに頼んで、小道具を用意してもらった。

プリンが7、8個。同じくらいの数のヨーグルト。卵ひとパック。パック入りのコーヒー牛乳。

服を脱ぎ、全裸で男の前に立った。

「い、いまから自分の体を汚します……どうかお楽しみください……」

(2) 自分を汚す

まず、紙パックのコーヒー牛乳を手にとった。口を開け、胸元まで持ち上げる。

「こ、これから自分で体を汚すところを、どうかご覧ください……」

そう言つて、中身をたらたらと首筋に垂らしていった。

茶色い牛乳がおっぱいの谷間を流れて、おへそでちよつと溜まり、股間の茂みに絡まっていく。

冷たい……それにヌルヌルする……。

変な気分だった。

こんな姿を見せて恥ずかしいと思う反面、汚れる姿をもっと見られたいと思う。

じっと見ている相手にもっと悦んでもらえるよう、肌にいやらしく液体を塗り始めた。

おっぱいやお腹、そしてお尻や股間にも、茶色い液体をぬちやぬちやと塗り込める。

「ん……んふ……」

ヌルヌルした感触と、見られている視線で、だんだん体が熱くなつてくる。

もしかしたら、こんな変態プレイに感じる素質があつたのかもしれない。

少し足を開いて、腰を突き出した。

ぱっくり開いた割れ目も、その上で茂るヘアも、コーヒー牛乳でびちゃびちゃになっている。

そこを見せつけるようにして、股間に手を這わせた。茶色にまみれたオマンコを広げて、内側のピンク色を見せつける。

茶色く汚れた体を隅々まで観て……私を選んで……。

股間からとろーりと、透明な液体があふれてきた。

(3) 肉の標的

ここまで自分を汚したのに、男はいまひとつ満足していないようだ。どうしよう、ただ女体を汚すだけじゃダメなの？他にどうやれば相手が悦ぶのか、わからない……。

戸惑っていると、スタッフの一人が助け舟を出してくれた。

「先生からおまえの体を汚してもらえ」と。

そうか、そうすればいいのね！

私は並んでいる品々を相手に指し示した。

「こ、ここにある物を私に投げつけてください。おっばいやオマンコを的にして、ダーツみたいに遊んでください。私の体をべちゃべちゃに汚して、楽しんでください！」

私は必死だった。的にされない生き延びられないなら、喜んで体じゅうぐちゃぐちゃになるわ！

先生は楽しそうに笑う。自分で投げるのは大変だからと、回りの若いスタッフに投げさせるようだ。

彼らは二人一組で競い始めた。私を壁際に立たせ、おっばいが何点、オマンコが何点と、勝手に点数を決めて物を投げつける。

最初はプリン。

一人が投げた黄色い中身が、私の片方のおっぱいに当たった。

「ああっ！」

すごい、これ。

ぶよぶよしてるから当たっても痛くはないんだけど、べちやつと潰れておっぱいが黄色く汚されるのが、すごく衝撃的。自分が人間以下になったみたいな屈辱で、頭がくらくらする。

胸元、お腹、太もも。

私の体のいたるところが、どろどろの黄色いプリンにまみれていっ

た。

「ああ、汚される。私の体、こんなにどろどろにされるう」

舌を噛みたいくらい悔しくて恥ずかしいのに、私はなぜかゾクゾクしていた。

もつとぐちやぐちにされたい。人としての尊厳を奪われたい。そんなことを思ってしまう。

プリンがなくなった。次は生卵。

殻があるから、敏感な乳首やクリに命中すると、かなり衝撃が強く

て、声が出てしまう。

「あん」

ぐしゃつと割れた卵から中身がどろりと流れ出し、肌をとろとろと垂れていく。すごくエッチだ。

卵も全部なくなる頃には、もう私の方がどうしようもないくらい、興奮していた。

どろどろの体で男たちに近寄ると、まだ使われていないヨーグルトを手に取り、彼らを見上げて懇願する。

「どうかこのヨーグルトを、奈々美のおっぱいや股間に塗り込めてください……いろんな物をぶつけられてゾクゾクしている私の体を、どうかヨーグルトでべちよべちよに冷やしてください……」

男たちは笑いながら実行してくれた。

「ああ、冷たくて気持ちいい……オマンコぬるぬるして感じちゃう……」

ぬちやぬちや。

ねちよねちよ。

男たちの手のひらでいやらしく全身に塗られ、私は思わずため息を漏らしていた。

「はああ……」

脚を大きく開き、オマンコをさらけ出して、腰を浮かせてよがってしまふ。

「いい、これいいの。体じゅう汚れて惨めなのに、べちやべちや塗りたくられるのが、気持ちよくて仕方ないの！」

思わず股間に手が伸びた。彼らの目の前で、ぐちゅぐちゅとオナニ

ーを始めてしまう。

「ああっ！ クリちゃんいい！ ヨーグルトと一緒にこすると、ぬるぬるして気持ちいいの！」

もう、興奮で頭は真っ白だ。

座ったまま見ている先生に向けて、がばりと脚を開いた。いやらしくこすりながら腰を降る。

「見て……ぐちゃぐちゃオナニー、いっぱい見てください」

ぐちゃぐちゃと、私は昇りつめていく。

「ああつ、変態オナニー見られながらイクつ。だめえ、イクうううう
ー！」

(4) 敗北

……すべてのプレイを終え、シャワーを浴びた私は、愛理と並んで男の前に立った。

これから、勝敗が決まる。

先生は、指先を愛理に向けた。

私は……負けたんだ！

スタッフたちに両腕をとられ、私は部屋から引きずり出された。

「いやああ！ やだ、助けて！」

敗者に未来はない。その言葉が頭で渦巻いている。

「ねえ、私、どうなっちゃうの？ なんでもするから、助けて！」

スタッフの男たちは顔を見合わせて言った。「俺たちを満足させれば助けてやる」と。

私は彼らに駆け寄ると、一人の前にひざまずいて、ズボンの股間に頬擦りした。

「いっぱい気持ち良くします。お口でも、オマンコでも、おしりの穴でも、好きなだけオチンポ入れてください。一生ペットとして飼って

ください
「

それから、目の前のジツパーを下ろし始めた。

(5) 真相

これから話すことは、後で知っただけ……。

負けた私は、別に命を取られるわけではなかった。このゲームに参加したこれまでの女の子たちも、皆ちゃんと生きているらしい。

どういうことかって？ 「未来はない」っていう言葉の意味は、「普通の女の子としての未来はなくなる」っていうことだったんだ。

このゲームを通じて男性を悦ばせることを覚えた女の子たちは、その強烈な体験のせいで、もう普通のエッチじゃ物足りなくなる。

自分を投げ出して必死で相手を悦ばせることでしか、自分も満足で

きない体になつてしまふ。

つまり、「普通の女の子として生きる未来」がなくなって、代わりに「変態行為に感じる、淫乱な娘としての未来」が待っている、というわけ。

でもこのときの私はそんなことも知らず、ひたすらスタッフに奉仕して助かることしか考えていなかった。

そして彼らの思惑通り、私は次第に、自分を投げ出して得られる快感に酔い始めていた……。

(6) 未来のために

夢中で彼らのズボンを下ろすと、横に並んだ左右のオチンポを、私は代わる代わるしゃぶり始めた。

「ど、どうか私の手と口で、いっぱい気持ち良くなってください。お二人のぶつといオチンポを、顎が外れるくらい、じゅぶじゅぶ舐めしゃぶります。そ、それから、お尻の穴にも舌を突っ込んで、レロレロします。ですからどうか、私を助けてください！」

私は淫乱メス犬と化して、いやらしくフェラを続けた。

啜えたままメス犬らしく腰を振ったり、仰向けの一人をしやぶりながらも一人にお尻を突き出して、股間を好きに弄んでもらった。

「い、いっぱい出してください。オチンポを舐めてる顔や、いろんなものをぶつけられた体に、お二人の孕ませ汁をいっぱいぶっかけてください。ドスケベ淫乱な私を、ドロドロのザーメンで汚してください！」

ああ、本当に堕ちてしまいたい……。

男たちの慰み者になって一生を送るのも、幸せなのかも……。

「四つんばいでオチンポを咥えてる私のオマンコやお尻に、後ろからぶちこんでください！ いやらしい奈々美の体を好き放題に犯してください！ 体じゅう使って気持ち良くしますから、どうか皆さんの肉便器として、生き延びさせてえ！」

3556字